恋姫たちの様子がおかしい

木下文@木下衣玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫たちの様子がおかしい

【Ｎコード】
Ｎ９０６５Ｘ

【作者名】
木下文@木下衣玖

【あらすじ】
俺の名前は北郷一刀。なんやかんやで何十回何百回何千回とタイムリープした伝説の男だ。
さて、ひとつだけ聞きたいんだが……。
俺の恋姫たちがこんなにおかしいわけがない。

俺の様子がおかしい（前書き）

どういうことなの

俺の様子がおかしい

俺の名前は北郷一刀。言わずと知れた天の御遣いだ。

ここで衝撃の事実を暴露すると、俺には時間をループする能力がある。

……正確には、強制的にループさせられる、だがな。

俺が初めてここに降り立った時、出会ったのは劉備こと桃香達だった。

俺はそのままコイツらに天の御遣いとしてさんざ利用され、ロリ軍師の目論見通りに天下三分を成し遂げた。

天下三分の立役者と言っても過言ではないであろう俺の立場が異様に低かったのは、一生忘れないだろう。

でもまあ、それなりに充実した人生を過ごした後、恋姫たちに見守られて老衰で死んだ。

普段あんなにパワフルだったあいつらがボロボロ泣くんだもの、思わず笑っちまったぜ。

んで、死後の世界はどんなだろうなーとか、そんな厨二的思考をしつつ死んだわけなんだが。

気づいたら、また荒野に横たわっていた。

状況が飲み込めないまま辺りをキョロキョロしてると、頭に黄色い布を巻いたチンピラ３人組に剣で脅された。
どこかで見た光景だなぁと呑気に考えていると、何時の間にかチンピラ３人組が全員死んでた。何が（ｒｙ）
そんな放心している俺に声をかけてきたのは、朱色の槍を持った美女、趙雲こと星だ。

何故か若返っていることを不思議に思いつつも、また出会えたことに喜びを感じて真名を呼んだら、いきなり怒鳴られて切り殺された。

うん、これには俺もびびったね。

そしてまた気づけば荒野で横たわってて、チンピラに脅迫されて、星に助けられてと全く同じ状況に遭遇したわけだ。
混乱しつつも真名を呼ばないようにしながら星と会話してると、なんと星はこう述べたのだ。

『この荒んだ時代を終わらせることの出来る主君を探す旅をしている』

この台詞を聞いたとき、俺はぴーん！　と来たね。

俺は、タイムトラベルしたんだと！

まあ、何で時間逆行したのかとかは全く分からなかったが、『事実は小説より奇なり』で片付けた。ことわざマジ便利。

そんで今度は趙雲と一緒に行動した。ハムのところにも行ったし、オーッホッホのところにも行った。

そして最終的に呉に仕えることにした。星とは別れたが。

んでまた呉√でなんやかんやあって無事戦乱の世を生き抜いた俺は、呉の皆と子作りして後継者を残した後老衰で死んだ。

そしてまた気づけば荒野に横たわっていた。

そろそろ驚かなくなってきた俺の前に現れたのは、例のチンピラたちだ。

そぃつらは一字一句違わない常套句で俺を脅してきた。

もういい加減まともに相手するのめんどくさかったから、逆にボコボコにしてやった。思春と祭に鍛えられた成果がここで生きたな。

で、そいつらから事情聴取すれば、やっぱりまたタイムスリップしていた事が発覚。

桃香達も星達も来ないしどうするかと悩んでると、なにやら遠くから大軍がやってくるではないか。

何だと思えば、それはあのロリ覇王こと華琳だった。

で、またなんやかんやあってそのまま魏に参入することになった。

何故かチンピラ共も一緒に。

でまあ俺は戦えるといっても春蘭とかに敵うはずもないから、軍師ポジションに落ち着いた。チンピラ共は兵士になった。

未来を知っている俺にとって軍師ポジションというのはまさに天職だ。なにせ相手の策を全て知ってるんだから。例えるなら強くてニューゲームだ。

そんな俺を抱えてる魏に他の勢力が勝てるわけもなく、無事魏が三国統一した。そして俺はやっぱり武将達と子作りして後継者を残した後、老衰で死んだ。この死に方がテンプレ化してきたな。死に方がテンプレってどんなだよ。

そして４回目のタイムトラベル。もう予測できていた俺はあせることなく速やかにチンピラをボコボコにした。
その時は誰も来なかったから、仕方なくチンピラ共を従えて適当に歩き始めた。

そしてたどり着いたのは洛陽。そう、董卓√である。

俺はそのまま城に軍師見習いとして仕官した。
そして俺は未来の知識をフル活用してグイグイと功績を残し、あっという間に軍師を取り仕切る立場である詠の補佐という立場についた。役職的にはねーさんより上だ。ちなみにねーさんというのはねねねの事だ。ねがさんこだからねーさん。覚えやすいだろ？
高い立場についた俺は、まず来るであろう反董卓連合への対策を始めた。
対策と言っても難しいことはしてない。要するに袁家の馬鹿２人を予め懐柔しておいただけだ。

数々の恋姫たちを落としてきた俺に女の1人や2人、どうってことないさ。

そんな2人が俺のいる董卓軍を潰そうとするはずもなく、反董卓連合は結成されなかった。良かった良かった。
その後はひたすら戦に関わらないように努めた。別に俺は三国統一したいとか思ってないし、月たちも平穏を望んでたからな。
そんで結局、三国は天下三分された。俺いなくても出来るのかよ。
最初の俺の頑張りって一体…。

ちなみに俺たち董卓軍は中立的立場としてそのまま君臨することになった。ご都合主義万歳。

そんな感じでハートブレイクショットされつつも、月たちと幸せに暮らした俺はテンプレ通りの死に方をした。

そしてまた、あの荒野に居たのである。

そう、つまり俺の能力とは『死ぬと時間をループさせられる能力』である。喜んでいいのやら悪いのやら。

そんなのを何回何十回何百回何千回と繰り返していた。
おかげさまで武術も恋を超え、頭脳も朱里と雛里を足して１０で掛けたぐらいになりました。なんて合法チート。
というか俺もよく狂わなかったな。自分ながらすげえわ。

そして今、何回目か分からないループをして、荒野に立っているわけであるが。

……これは初めての事態だ。俺はどうするべきなのだろうか。

「「「兄貴！　や　ら　な　い　か」」」

「やらねえよ」

「「「うぼわーっ！！」」」

股間を盛り上げながら迫ってきたチンピラ3人を蹴り飛ばして、また思考に没頭する――――ことは出来なかった。

「おい一刀！　聞いてるのか！？」

「一刀のために聞いてるのですよ？　そこを理解してるのですか……？」

「あ、あの、一刀さんに、決めてもらえればな、って、その…」

褐色桃髪の美女が俺にそう怒鳴りつけ、巨乳紅髪の美女が笑顔ながらも不気味なオーラを漂わせつつそう言い、金髪ツインテドリルの美少女がおどおどしながら俺の目を子犬のような目で見ながらそう言った。

……正直、意味がわからない。

君主たちの様子がおかしい（前書き）

言い忘れましたが作者は原作未プレイ。ｗｉｋｉと二次の情報しかないのでご了承を。

君主たちの様子がおかしい

「一刀！　聞いてるのか！！　返事をしたらどうだ！？」

「一刀…。まさか聞いてなかったなんてことは、ないですよね？」

「え、あの、その……」

今すぐにでも自決したい衝動に駆られるが、何とかそれを抑え今の状況を整理する。

テンプレ通りに荒野に立ってたらいきなり大量の軍勢に取り囲まれてその中から上の３人が出てきて言い争いを始め今まさにその矛先は俺に向いている。

うん、なんだこれ。

とりあえずこのまま黙ってるのは得策ではないと思うから、適当に返事しておこう。

「あー、うん。聞いてた聞いてた。つまりあれだろ？　竹多哲耶のＣＭソングが無駄にかっこよくてムカつくって話だろ？　なんたってＣｒｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｎ！！が歌ってるんだもんな、そりゃいい曲だわ」

「「屋上」」

「屋上ってどこ？　いやなんでもないですすいませんでした」

「え、えっと…だ、大丈夫ですか？」

音速、いやニュートリノ速を超えた速さで土下座の体勢に移行する。これまでの人生で培ったスキルその1、とりあえず謝っとけだ。鍛えられた俺の土下座への移行スピードに敵う奴などいるだろうか？　いやいない（反語）。

「全く一刀は…。まあいい。もう一回説明してやろう」

「有難う御座います雪蓮様。この北郷、感謝の極み」

「一刀…？」

「すいません桃香さん目からパルパルビームやめてくれませんか恐怖とストレスで俺の胃腸から胃液が分泌されてやばい」

「だ、大丈夫ですか！？　すぐお医者さんを…！」

「大丈夫だよありがとう華琳ちゃんマジ天使」

なんだこの修羅場を超えた修羅場、いわばキングオブザ修羅場は。目線だけで殺されるんじゃなかろうか。

「一刀、話を続けていいか？」

「あ、はい。どうぞどうぞ」

雪蓮がコホンと咳払いした時に、何故かポニーテールにしてる髪が揺れてドキッとした。
美女は何やっても様になるな。目の保養目の保養。

「「……」」

横から殺人目線と捨てられた子犬のような目線が僕の心を貫くけど僕はいっしょうけんめいむししましたまる。

「つまりだな、お前を引き入れるのは何処の陣営がふさわしいか、ということについて話していたのだ」

「何処の陣営…だと？」

「そうだ。まあお前も知ってる通りこの大陸は我ら呉と桃香の蜀、華琳の魏の三勢力によって治められているわけだ。それで管路とかいう胡散臭い占いババが『今日天の御遣いが来るんだからね！』って言ってたから我々三人がお前を保護するためにここまで来たというわけだ」

何故占いババを知ってるのかとか何故管路がツンデレなのかとか何故真名を交換してるのかとかもう天下三分してるとか知らなかった

YOとか言いたいことは色々あるがありすぎて逆に聞けない。
まあ要するにこの三人…っつか三勢力は何故か俺が欲しいわけで（非性的な意味で）、だが俺は影分身の術を使えるはずもないから1人しか居ないわけで、流石に俺を三等分するのは駄目なわけで、じゃあ俺を引き取るのにふさわしいのは何処か！　と今の今まで熱い議論を交わしていたというわけか。おk把握。

「うん、把握した」

「そうか。ではお前はどこに行きたいと思う？」

「そうですね、やはり最後は本人に決めてもらうべきですね」

「あ、あう…」

「え、そこで俺に答えを求めちゃう？」

どうしよう、何処の√を答えても後ろから『絶』か『南海覇王』か『靖王伝家』に刺されるヴィジョンしか浮かばない。俺はどう答えるべきなんだ！　教えて赤ペン先生！

【諦めろ】

赤ペン先生エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！？？

「一刀…」

「一刀…？」

「一刀さん…」

そう考えてる間にもヤンデレ（暫定）三人はグイグイと俺との距離を詰めてくる。

何故だ…！　武力では俺が勝っているはずなのに、何故か手が出ない…！　これが覇王色の覇気とでもいうのか！？

考えろ！　考えろ俺！　俺なら出来る！　いややれる！　やらないと死ぬ！　死にたくなぁい！！　魅上ィ！　お前うらｇ（ｒｙ

「一刀…」

「一刀…？」

「一刀さん…」

待て待て待て落ち着けおまいら何故各々の武器に手をかけるんだ！　そのまま俺を手にかけようとでもいうのか！　あ、今のちょっと上手くね？　どうでもいいですかそうですか。

頑張れ、アイディアをひねり出せ俺！　出来るよお前なら！　多分！　きっと！　恐らく！　Ｍａｂｙ！

……！！！！！　これだぁぁぁぁ！！！

「いやぁ、ぶっちゃけ俺は今のお前達がどんな政治をしてるのかとか武将達がどうしてるのかとか何故おまえらがヤンデレたのかとか分からないことだらけだからさ！！　だからまずはお前達のところを一回全部見て回ってから判断したいと思うんだけどどうでしょうか！！」

何故か最後は敬語になってしまったが、それは仕方ないんや。誰もあの目に、逆らえないんや…。

「…まあ、教科書通りの逃げ道ね」

「さすが一刀…そういう所にだけは頭が回りますねぇ」

「一刀さん…」

何か俺けなされてない？　大丈夫？　イジメられてない？　イジメだったら俺泣くよ？　教室の隅っこでさめざめと泣く覚悟はあるぜ？

「それじゃあ、まずは何処の勢力に行くのか…どうやって決めましょう？　一刀はどうせ決められないでしょうしねぇ」

「どうせって言うなどうせって！　それ結構心に響くんだからな！」
「あ、あの…。公平に、ジャンケンでもしたらどうでしょうか？」
「ジャンケンか…。ふむ、それが一番手っ取り早そうだな」
「全無視？　オールスルーなの？　もしくはオールブルーなの？
全ての海がそこにあるの？」
「「「最初はグー、ジャンケン……」」」
「ちょっと教室の隅でさめざめと泣いてくるわ」

――少年号泣中・・・――

「一刀！」
「……？」

無言で振り返ると、晴れ晴れとした笑顔の雪蓮がいた。

「まず最初は、我々のところに来てもらうからな！！」

「くそ…何故あそこでパーを出したんだ…私の馬鹿…」

「あう…残念です…」

雪蓮の後ろで肩を落としてる二人は、極力無視することにした。慰めの言葉でもかけようものならまためんどい展開になるのは目に見えてる。

べ、べつにさっきの意趣返しとかそんなわけじゃないんだからね！！

「よし、馬に乗れ一刀。早速呉に来てもらうぞ」

「え、もう？」

「もうだ。早くしろ」

雪蓮に促され、渋々馬に乗る。

それと同時に、雪蓮も馬に乗る。……何故か俺と同じ馬に。

「あの、雪蓮サン。この体勢だと馬に乗りづらいんですケド…」

「なんか言ったか？」

とても嬉しそうな声でそういう雪蓮の顔は、すこぶる笑顔だった。

「「……」」

無言の圧力には屈しない、それが俺。北郷一刀をよろしくお願いします！　って、選挙じゃねーよ。

……1人ツッコミって、こんなにも空しいものなんだね。空虚だ…。

「さ、行くぞ一刀！　わが故郷、呉の地へ！」

「あらほらさっさー」

気の抜けた返事を返して、馬を足で蹴る。そして馬は軽快に走り出した。

……しばらく四つのジェラシー視線を感じ続けたのには、鳥肌が立った。

呉の様子がおかしい？（前書き）

自己紹介回その1。もう自分で書いててもなんだこれってなった。

あ、それと書きためなんてないから毎日更新は今日でおしまい。神は死んだ。残念（笑）

※誤字報告を受け、美命を明命に修正。茜様ありがとうございます。
※更に誤字報告を受け、冥淋を冥琳に修正。光と闇の竜様ありがとうございます。

呉の様子がおかしい？

「一刀、見えてきたぞ」

男らしさ１０割増しの雪蓮が指差したのは、遠目にでも活気付いてるであろうと予測できるほどに大きな町。
あれが例の建業って奴かね。

「あれが例の建業だ」

ほらね、俺の勘はどうでもいいところでのみ冴えわたるんだ。『無意味な預言者』という異名を賜ったのは記憶に新しい。

「じゃあ早速で悪いが城に来てもらうぞ。皆にお前が帰ってきたことを報告せねばなるまい」

「あいあい」

俺は馬の腹を蹴って更にスピードを出した。亜音速を超えるぜ！

◆◇◆◇◆◇

予想通りに活気付いていた町を馬を引きながら歩いてるとでっかい城についた。
馬をそこら辺にいたオッサンに任せて雪蓮の後をついていく。
突いてイクじゃないから勘違いしないように。

「ここだ」

もう既に全員集まっているらしい謁見の間の扉を有無を言わずに開く雪蓮。
ちょ、心の準備とかさせてくれないんですか？　救いはないんですか！？（迫真）　仕方ないね。（諦観）

「皆の者、今帰ったぞ！！」

雪蓮が声を張り上げると、謁見の間の中にある視線が雪蓮と俺に集中する。そんなに見つめるな照れる。

「あらぁ、お帰りなさぁい雪蓮」

そう言って近づいてくるのは、黒髪ロングに褐色肌で眼鏡で巨乳という一部の猛者が見たらショック死しそうな格好をした痴女。

「ああ、ご苦労だったな冥琳」

冥琳…だと…？
こ、こんな誰にでもすぐ股開きそうなガングロ痴女が、あの知性溢れるパイオツ姐さんこと冥琳だというのか！？

えーりんえーりん！　（　゜∀゜）o彡。　めーりんを助けてえーりん！　（　゜∀゜）o彡。

「あらぁ？　そっちはもしかして…一刀かしらぁ…？」

「あ、こんちゃっす冥琳さん。最近どう？」

「体が疼いて仕方ないのよねぇ…」

「うわぁいこの人ガチだ」

俺の知ってる冥琳は最早いない。タイムリープした結果がこれだよ！　神は死んだ！

「何を呆けている一刀。さっさと他の面子とも挨拶してこい」

「うぇーいｗｗｗ」

面倒くさいが、コレは一種の様式美だからな。やらないわけにもいかないだろう。

という訳で近くから手当たり次第にシテいくことになった。今えっちぃ事考えた奴は全裸で卑弥呼の所に池。新しい世界を見れるだろうよ。キラも大満足だ。

「ＨＥＹ！　久しぶりだね君かわうぃ～ね！」

とりあえず目に入ったお猫様至上主義な彼女のところにチャラ男っぽく挨拶してみた。
うん、自分でやっててものっそいウザい。俺だったら鳩尾にハートブレイクショットした後月光蝶を呼ぶね。

「……」

そんなウザい俺にウザい挨拶をされた明命は、俺にチラッと視線を向け

「……ペッ」

俺の足元に唾を吐いた。

……なん…だと…？

「悪いな一刀。お前も知ってる通り明命は人見知りなんだ。久しぶりに会ったお前に気恥ずかしさを感じてるんだろう」

「いやこれ人見知りじゃなくて人嫌いじゃね？　つか俺嫌いじゃね？　だってゴミの掃き溜め並に薄汚れた目で俺を見てくるもの。その目の奥に確かな殺意を迸らせてるもの。今にも背中のでっかい剣抜いて襲い掛かってきそうだもの」

後ろに性的なものをつけることが出来たらどれだけよかったか。明命は俺の顔に向けてもう一度唾を吐いて退出した。その際に俺の股間を睨んだあの濁った目を俺は忘れないだろう。俺を女にするつもりか明命よ。

「じゃあ次は隠ですね～＾＾」

唾を袖で拭いている俺にそう言いながら近寄ってきたのは、巨乳ならぬ魔乳を持つ最終鬼畜おっぱい眼鏡こと隠だ。

「久しぶりですね一刀さん！＞＿＜　久しぶりに会えてとても嬉しいです（＊＾＾）ｖ　短い期間だとは思いますがよろしくお願いしますね（ノシ＞ω＜）ノシ」

……何こいつうぜぇ……

「どうしましたか一刀さん？（？＿？）　あ、何か気に障るような事でも言ってしまいましたか！？　（（（゜Д゜；）））　だとしたらすいませんでした！悪気はないんです～（ノ＿＜）。。」

「え、なにお前ウザキャラで方針固めたの？　その路線で突っ走っちゃうの？　やめといた方がいいと思うよその路線たぶん人が飛び込むから」

「ウザキャラってなんですかぁ～？（＊´∀｀）？　隠、そういう難しいことは分からないんです～ｖ（・ω＜）☆テヘペロ」

うぜええ！！！！！！！

なにこいつ蝶☆ウザイー！！！　俺よく我慢できてると思うわー！

これ多分釈迦も飛び膝食らわせるわ！　ガンジーが助走つけて殴るレベルだわこれ！！　オバマが公衆の面前でサノバビッチ連発するレベルだわこれぇぇぇぇぇぇぇ！！！

「あ、そういえば！？（゜Д゜；）　隠、まだ仕事があまってるんでした～（゜＞＿＜゜）　すいません！また後で～＾＾」

そういって隠こと媚売り糞ビッチは魔乳をたゆんたゆんと揺らしながら謁見の間から出て行った。

おk、よく耐えた俺。このストレスは後で壁パンで晴らすとしよう。

「……ま、まあいいや。次の人行こう……」

心がかなり磨り減ったが、まだ人は余ってる。そいつらにも挨拶しなければ俺に睡眠という休息の時間は訪れない。ああ、待っててくれいとしのベッドちゃん…！

「久しぶりじゃのう、一刀」

「む、その声は…」

俺が振り向くとそこには、褐色白髪巨乳熟女黄蓋こと祭がいた。

「久しぶりだねー。元気してた？」

「うむ、毎日粗食を心がけてるからのう。まだまだ現役じゃて」

「…あ、ああ。そっかー。元気ならいいんだよー」

「ふふふ、おぬしを見ておると孫のことを思い出すわ。ああ、今度孫に胡麻煎餅を持っていってやらねばのう」

「……あああああ！　美味しいよね胡麻煎餅！　俺も好きなんだよねー！」

「そうなのか？　なら今度持ってきてやろう。緑茶と一緒に食べると美味いんだこれが…、あだだだだだ！　こ、腰が痛いのう…」

何処のおばあちゃんだあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！？

前からちょっと所々の行動がおばあちゃんっつか老人っぽいなーとはたまに思ってたけどこれもう近所の無駄にお節介焼きたがるおばあちゃんじゃねえかあああああ！？

い、いや待て！　待つんだジョー！　確かに性格はおばあちゃん化してるが、外見はそのままなんだ！　まだ、まだ老化が完全に侵食していない可能性もある！

ここはひとつ、俺の命を賭けて確かめてみよう…！　くだらないことに命をかけるのが、ギャンブラー！　ざわっ…ざわっ…！

「おい…っ！　お前…前から思ってたけど…！　所々！　おばあちゃんぽい行動してるよな…っ！　年なんだし……少しでも長く生きてたいなら…もっと…老婆らしくしてな…っ！」

どうだ…っ！　前の祭なら…間違いなく…っ！！　食いつくっ！！リスキー…ハイリスクローリターンだが……それだけの価値はある…っ！！

「ふぉふぉふぉ、こりゃ一本取られてしまったの。若者の言葉を聞き入れてここはひとつ、まとまった休暇でもとってみるかのう」

が…駄目…っ！　駄目…っ！　駄目…っ！

無かった…っ！　希望なんて…ない…っ！　中身はすでに……掛け値なし…っ！　疑いようもなく……おばあちゃんだ…っ！

「うう……うううう～～～～（ボロボロ）」

泣く…っ！　涙…顔をグチャグチャにして…醜く涙っ…！　苦痛…っ！！　いない……もう…あの祭はいない…っ！　神は…死んだ…っ！！

「なにを泣いてるんだ？」

「……なんでも…ない…っ！！」

「（疲れてるのか？）…分かった。もう今日は休め。残りの人物は後日に廻そう。誰かあるか！」

「ここに」

「こいつに部屋を宛がってやれ」

「かしこまりました。ではこちらへどうぞ」

「やめろ…っ！　…せ……離せ……っ！　何処に連れて行く気だ…！　俺はもう…あの船には…乗らないっ…！　鉄骨渡りだなんて…

っ！！　狂ってるッ……！！（ぼろぼろ）」

「どうしましょうこれ」

「気絶させるか」

「とりゃぁッ！！」

「はぁうっ！！！」

体をビクンビクンさせながら、俺は気絶した。

疲れたよパトラッシュ…っ

呉の様子がおかしい？（前書き）

自己紹介回２。３０分クォリティ。

今回は出てくるのが３人。しかもまともに絡むのは１人だけで、天丼ネタたっぷりで掛け合いすら糞つまんない回。
お願いだから何も言わないでください。所詮俺なんてこんなもんなんです。ごみくずですいません。

あとなんか書きたいことがあったはずだけど忘れた

呉の様子がおかしい？

「かまぼこっ！！？」

ガバァッと体を起こすと、そこは寝室でした。

寝汗で着ている服がビッショリだ。服を着替えたい、今すぐにだ。

それにしても恐ろしい夢だった。まさか父さんが母さんの菊〇にかまぼこを挿入する所を超高画質で見せられるなんて…。

…あれ、そういや俺なんでこんなところに…？

「……ああ、雪蓮に首トンされたのか」

あれに憧れて友達で試してガチギレされたのは俺だけじゃないはずだ。

その後突き飛ばされて机に頭打って逆に気絶させられたのは俺だけだと思うが。

「とりあえず、服着替えるか」

服を脱いで、使用人が用意してくれたのであろう服を手に取る。
どうでもいいが、俺の体はかなり引き締まってる。俺がタイムリープする際に何故か記憶と一緒に肉体も引き継がれるんだ。
つまり、祭とか思春とかに鍛えられた成果はタイムリープしても失われないんだよ！　な、なん（ｒｙ）

ガチャッ

と、そんな時扉が開く音がした。
そちらに目をやると、紫がかった髪をお団子状にして纏めている、スラッとした美脚が素晴らしい思春期の中高生のズリネタになること間違いなしの女性、思春がお盆を持ってこちらを見ていた。

「「……」」

俺と思春の視線が交錯する。
補足しておくと、今の俺の格好はパンツ一枚だ。服を着替えようとしていたところだからな。
そんな俺の裸体をまじまじと嘗め尽くすように見る思春。やだ恥ずかしい。

「「……」」

やっぱり無言のまま扉を閉め、俺の寝ていた寝台の横にある机にお盆を置いた。
俺は手に取った服を着始めた。

「「……」」

黙々と袖に手を通し、帯を締める。
その間も思春は俺の裸体をガン見していた。

そして数分後、俺は服を着終えた。
なんか本当に昔の服っぽい。下着も褌だったし。あれだ、昔の日本漫画とかで奈良時代の奴らとかが着てそうな服だ。白くてふわふわ？した奴な。

んでまあ、俺は服を着終えたわけだが……。

「「……」」

なんだろう、気まずいとかそういうレベルじゃないな。
気がゲロマズって感じだ。

そんな事を考えてたとき、俺と思春の視線がまた交錯した。
それは現代でいうアイコンタクトという奴で、今の一瞬の間に思春と意思疎通しあった俺達が弾き出した結論は……

「お気づきになったんですね、よかったです」

「いや、こっちこそすまんかったな。迷惑だったろ」

「いえいえ、そんなことはないですよ」

「そうか？　ならいいんだけどな」

無かったことにすることだった。

「むしろこっちが謝らなくちゃいけないとこです。一刀さん、雪蓮様に無理やりに連れてこられたと聞いて…」

「うん、まあ無理やりというか脅迫というか強請(ゆす)られたというか…」

「ふふ、呉の君主様はいつヤクザになっちゃったんでしょうね」

「あれ見たらヤクザなんか可愛く見えるね。多分白い粉運んでる組織のトップに立ってるよあれ」

「じゃあ私達が白い粉を運ばなくちゃですね」

「まだこの若さで足を汚くしたくはないから却下」

というかどうしようこの子すごいまとも。

なんつうのかな、すごく気さくだし、ノリもいいし、喋ってて楽しい。華琳ちゃんにつぐ俺の心のオアシスになってくれそうだ。ＯＬみたいだ。

「そういや思春はどうしてここに？」

「私が一刀さんの看病を努めることになったんです。あの場で挨拶できなかったしって」

「でも仕事とかあるんちゃうん？」

「ありますよ。だから看護係は私だけじゃないんです」

「ということは――」

他にもいるのか、とは言えなかった。何故なら腹部への突然の衝撃に肺の空気が抜けたからだ。

あまりにも不意打ちなその攻撃に、何の構えも取れなかった俺の体は耐え切れなかった。

内臓が押しのけられ、傷つき、折れた骨が心臓に突き刺さった。

想像を絶する苦痛にのたうち回ろうとするが、体に何かが乗っていてそれも叶わない。

その間にも心臓は傷口から血を吐き出し、だんだんと視界に霞がかかってきた。脳に血が回らなくなってきたのか、頭がボーっとする。

とうとう腕や足さえ動かせなくなった。もう駄目だ――それを本能で理解した。悟ってしまった。

ああ、またタイムリープするのか。今度はどんな外史を紡げるのかな。最初に会うのは誰なのかな。またチンピラたちをボコさなきゃな。というか、俺は誰に殺されたんだろうか。

でも、ひとつだけ分かったことがある。

俺は、とことん報われない性格だなぁ……と。

↓☆ＢＡＤ　ＥＮＤ☆↑

「一刀ー、おーい」

「蓮華様。一刀さん気絶してますけど」

「えー、なんでー？」

「（お前が突っ込んだからだろ阿呆かこいつ）蓮華様が頭突きしたからではないでしょうか」

「頭突きしてない、飛び込んだだけよ！　というか私は悪くないわ、悪いのは私を受け止められない貧相な体のコイツよ！」

「（どんだけ自己満な奴なんだよ死ねよ）あはははは……）」

「……思春、なんか言った？」

「（何も言ってませんよ）何も言ってねーよｋｓ」

「え？　今なんていったの？」

「（だから何も言ってませんってー）耳遠いのか婆かてめぇは」

「屋上来いや」

「上等」

「……突っ込めよ」

何か険悪な雰囲気になった2人は、その体から怒気を放ちながら部屋を出て行った。
うん、思春全くまともじゃなかったね。いい子なのは表だけで実は腹黒毒舌キャラだったね。蓮華がまともに見えるよ。それでも十分キャラ濃いけどね。僕もうおなかいっぱいだよぉ

「一刀ー。いるー？」

と、俺が思考に没頭してると外から声が聞こえてきた。
誰だ？　と思ったら、その人物が扉から顔を出した。

「遊びにー、来たよー」

……めんどいの来たぜおい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9065x/

恋姫たちの様子がおかしい

2011年10月30日03時06分発行